

裸で鑑賞する美術館に行くことになったクラスの話

春の朝の太陽が校舎を照らす中、2年B組の教室は異常な雰囲気包まれていた。黒板には「裸の美術館へ行く」という文字が大胆に書かれ、生徒たちはその衝撃的な内容に戸惑いと好奇心を隠せずにいた。

「えー、皆さん、今日の特別授業は美術館鑑賞です。ただし、普通の美術館ではなく、裸で鑑賞する美術館に行きます」と、美術の先生、斎藤先生が説明を始めた。「この美術館では、身一つで芸術を感じるために、入館者は全員服を脱いで入らなければなりません。」

教室内はざわめき、生徒たちの反応は様々だった。

佐藤健は、男友達に「これ、冗談じゃないよな？」と確認しながらも、内心ではこの非日常的な体験に興奮を隠せなかった。「裸で絵を見るって、なんかエロいな...って、違う、芸術的だ」と自分に言い聞かせる。隣に座る友達が「本当に裸で？」と聞くと、健は「まあ、見てみないとわかんねえだろ」と笑って答えた。

田中美咲は顔を真っ赤にし、「信じられない...裸でって...」と小さな声で呟いた。彼女はこの授業に抵抗を感じていた。「でもみんな一緒なら、何とかなるかな...？」彼女は友達と視線を交わし、互いに不安そうな笑顔を浮かべた。

中村直樹は、友人たちに「これはチャンスだぜ、女子の裸見れるってことだよな」と笑いながら言ったが、それに対して女子は一気に嫌悪感を示した。

山本香は、友達と「一緒なら大丈夫だよな？」と確認しながらも、心の中では自分の

身体に目が集まることを恐れていた。彼女は友達に「見ないでね」と言った。

岸本海香は、自分の裸が見られることを想像し、何度も顔を赤らめていた。彼女は美術鑑賞どころではなく、「嫌だ...」と小声で呟き、友達に「これ、どうしよう...」と不安げに相談した。

一方、金澤沙雪未は全く気にせず、「これ、いい体験になるね」と笑顔で話す。彼女は堂々とした態度で、クラスメートたちに「みんなが同じなら、何も恥ずかしいことはないよ」と言い聞かせた。

バスは美術館に到着し、生徒たちは降りて、美術館の入り口へと向かった。美術館の外観は近代的なデザインで、ガラスと鉄の構造が陽光に反射して輝いていた。入り口には「全裸で入るべし」という看板が大きく掲示され、生徒たちの心を更にざわつかせた。

美術館内には、広々とした更衣ロッカーがあり、男女一緒に服を脱ぐ準備が整っていた。

ロッカールームは、白い壁と木製のロッカーで統一され、清潔感が漂っていた。そこには、控えめな照明と香り立つアロマが、緊張を少しでも和らげるための配慮を感じさせた。

「さあ、みんな脱いでください」と斎藤先生が言い、生徒たちはぎこちなく動き始めた。